

ばあば
今井美沙子



思想の科学社

ばあば

今井美沙子

今井美沙子（いまい・みさこ）

一九四六年長崎県五島に生まれる。五島高校卒業後、来阪。会社勤めの後、結婚し一児の母となる。現在、大阪で夫と児童画のアトリエを主宰するかたわら、「掛塚留吉老人」（『思想の科学』一九七六年七月号）をきっかけとして以後、故郷・五島の人々の記録を書き続けている。

著書に『めだかの列島』『おなごたちの恋歌』（共に筑摩書房）、『ばんばのつぶやき』（サンブライト）、『少女ミンコの日記』（ポプラ社）、『私は人間が好き』（径書房）等がある。

〈検印省略〉

ばあば	著者 今井美沙子	発行人 加太こうじ	発行人 思想の科学社 東京都文京区後楽二一十六ー二	電話 〇三一八一三一七四五 振替口座 東京五ー八九〇七二	印刷 東京ベル印刷株式会社 製本 株式会社豊文社	一九八三年七月十日 第一刷発行 定価 一四〇〇円
------------	------------------------	-------------------------	--	--	--	--

「ばあば」とは

孫たちが

親愛の情をこめて呼んだ

この物語の主人公の

愛称である

目次

ばあば誕生	7
-------	---

五島藩とクリンタン	7
運命の出会い	14
サト連れ	
去られる	22
慶之進とサトの生活	30
クリンタン迫害	35
ばあば誕生	40
大阪の峠での引き渡し	46

ばあばの結婚	51
--------	----

山田家での子ども時代	51
実父母との対面	55
義姉の死	67
ばあばの結婚	73
長男と長女の誕生	81

ばあばの子どもたち

85

大阪での生活	85	夫の死	92
トの洗礼	100	再び神戸へ	105
太郎の結婚	120	サトの死	126
阪神大風水害	140	ヨネの結婚	95
		祈りと布教	112
		ばあばの楽しみ	133
		耕	サ

永遠の安息を求めて

145

墓を掘る	145	ヨネの死	154
島へ疎開	173	耕太郎の日記	161
へ	184	耕太郎からの手紙	177
最後の手紙	191	道子たち五島	198
孫たち	207	耕太郎戦死	217
		ばあば天国へ	223
		聖職者誕生	233

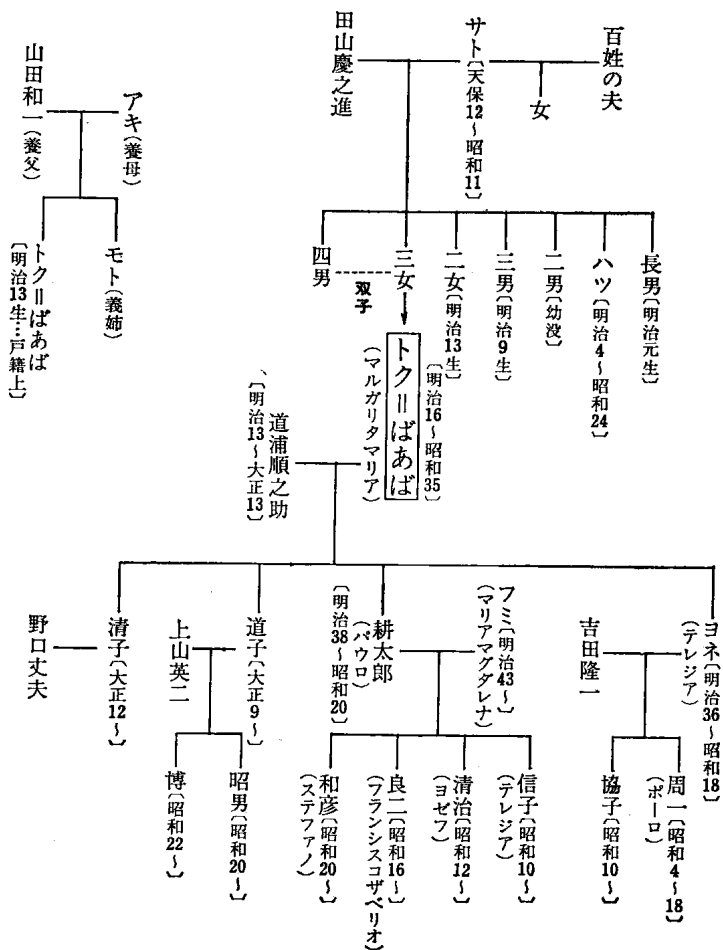
あとがきに代えて

230

参考文献資料

234

登場人物系図



ば

あ

ば

ばあば誕生

五島藩とキリシタン

この物語の主人公「ばあば」道浦トクが五島の水の浦に生まれたのは、戸籍の上では、明治十三年三月十日となっているが、実際は、明治十六年八月十九日である。

夫婦^{めおと}双子の片われである。

戸籍の年と実際の年のひらきが三年余りもあり、しかも、実際の年の方が若いということは、驚きである。

ばあばの実の父、田山慶之進は、五島藩の下級武士で、キリシタンの取り締まりの任にあたっていた。

五島は大小百数十の島々からなる諸島で、東シナ海を北東から南西にかけて弧状に並ぶ。そのうち、人間の住んでいる島が三十余り。

中でも、福江島、奈留島、若松島、中通島、宇久島の五つの島が中心になっているので五島

と呼ばれた。

その領主、五島氏は清和源氏にはじまる。

源義光の子孫で、肥前国巨瀬^{こせ}にいて、武田氏を名乗っていたといい伝えられている。

武田盛久のとき、五島を領し、宇久氏を称した。十二世紀の頃のことである。

宇久純玄のとき、五島氏に改め、子孫代々今日に至る。

五島藩は、江戸幕府成立後、石高一万五千五百三十石の小大名として発足した。

藩域は五島列島だけに限られており、財政的には苦しかった。

その上、後の藩主の三男に三千石の領地を分けたので、幕末の頃には一万二千五百三十石に減少していた。

当時の五島を知るよすがとして、フロイスの『日本史』には、五島へ上陸した宣教師による五島見聞記が次のように描かれている。

「支那から日本へ渡ると、平戸をさること海上約四十海里にして五島と称せる数個の島がある。漁業と塩とが豊富で、肥前、肥後の両国は鮮魚、魚油、乾魚、塩魚の供給をここに仰ぐ。また、鹿を多く産し、島民はすこぶる狩猟に熟して居る。彼等は他国より遠くかけ離れ、海中の島々に住んでいるにもかかわらず、言葉は上品で、相互間の交際にはよく礼儀作法を守り、容貌も卑しからず、共に商取引をする他国人に比して少しも遜色がない。島には殿が居て、一般民衆は勿論、重立った人々も皆之に服事して居る。島は他の重要地点よりかけ離れて居り、その幅

も狭く小さきがゆえに、一般に貧困で、塩、魚油、魚類を売って、米、麦、衣服、その他のものを求めて居る……」

永禄五年（一五六二年）、五島の領主宇久純定が病氣になったので、横瀬浦よこせうらにいたトーレス神父に手紙を出して医者を派遣してもらいたいと依頼した。

ヤコボという名の日本人の医者がやって来て純定の病氣を治した。

それから四年経た永禄九年（一五六六年）一月、ルイス・デ・アルメイダが日本人修道士のロレンソといっしょに五島へ行くようになったのは、そのような関係からであった。

二人は旧正月の十六日、金曜から福江でキリシタンの教えを説き始めた。身分ある武士を含めて四百人余りの人々が、説教を聞いた。

ところがその翌日の土曜日、純定が発熱し、頭と身体中が痛んだ。

その原因を、仏教の坊さんたちは、「南蛮人に外国の宗教を説かせたので、神仏のたたりで病氣になった」といいふらしたため、殿さま側近の武士たちも修道士たちと絶交した。

しかし、アルメイダは日本に初めて西洋医学を伝えた外科医でもあったから、医者として何とか純定の病氣を治したかった。

坊さんたちは病氣祈願のため大般若経をとなえた。

月曜日、アルメイダは、殿を診察させてもらいたい旨、人を介して伝えてもらったが、お付

きの武士たちが承知しないので、仕方なく、宿の主人である武士に頼み、直接、殿に会って、「私は薬も持っており、治療の経験もあるから、脈をとり、尿を検査させて下さるなら病氣を治してさしあげられると思います」と伝えさせた。

翌、火曜日の朝、殿の尿が届いたので、それを検査し、病床を見舞った。

殿の苦悩の様子は痛々しかった。脈をとり、病氣について自分の所見を述べ、後にとどける解熱剤についての説明をして帰宅した。

解熱剤は三粒届けた。

水曜日、再度訪れてみると、いくらか熱が下がっていた。しかし、午後、頭痛を訴えてきたので往診し、鎮静剤をあげた。夜、十時過ぎ、人をやって容態をきくと、殿は眠っているというので、アルメイダも眠った。

木曜日、往診して脈をとると全快していた。

アルメイダは殿より御礼として、猪、キジ、アヒル、魚、酒、米などをもらったが、それらでごちそうをつくり、人々にふるまった。

殿が全快したので、また説教することが許可された。

坊さんたちは、殿が病氣全快したのは自分たちのお経のおかげだといって、その後、火事があつたり、殿が少しでも病氣になると、アルメイダのたたりだと吹聴した。

そのためか、五島へやって来て百日にもなるのに一人の信者も生まれなかった。

アルメイダは諦めて本土へ帰ろうとするのだが殿は引き止め、地所と布教の便宜もはかつてくれた。

やっと二十五人の信者ができた。

福江の隣村の奥浦にあった寺を教会に改造した。五島で最初の教会である。

教会ができると百二十人が洗礼を受けた。

その後、アルメイダは引き上げ、ロレンソが五島の布教に奔走した。

純定の子ども洗礼を受けルイスと名乗った。

ルイスが洗礼を受けたことによって、五島にはキリシタンが増加し、教会も四カ所に増えた。ルイスの信仰と徳は外人の神父たちの心を打つのに充分だった。

天正四年（一五七六年）純定が亡くなり、ルイスが領主となった。第十九代純堯である。

純堯の弟玄雅はるまきも洗礼を受けて同じルイスを名乗り、文禄三年（一五九四年）領主になったが後に背教した。

一五八七年、秀吉が宣教師追放令を発したあと、五島にも迫害の嵐が吹き荒れ、ある者は殺され、ある者は島を出た。

結局、二千余名のキリシタンが日本の各地に散亡したのである。

その五島をキリシタンの土地として復活させたのは、大村領外海のキリシタンたちであった。

寛政九年（一七九七年）、五島藩主、五島盛運は大村藩主大村純伊に「五島は土地が広いのに、人が少なく、未開墾の土地が多いから、農民を移住させるように……」と依頼した。

外海は、海岸線こそ美しいが、丘陵が南北にあるため、農業には恵まれた土地柄ではなかった。肥沃な平坦地は殆どなかった。

この劣悪ともいえる土地に多くのクリシタンがひしめきながら住んでいたのは、

一、交通の不便さからくる監視の甘さ

二、貧しさゆえに保たれた信仰の純粹さ

三、優れた伝導者の影響

があったからである。

大村藩は、農民たちを五島へ移住するよう奨励した。

百姓たちは、「五島は土地が広いのに人が少ない」というふれこみを信じ、隣近所の人たちと移住するか否かの相談を始めた。

それに、当時の大村藩では、藩の経済の安定を計るため、人口増加を極力、おさえていた。

夫婦の間に子供が生まれても、長子以外の者は、養子縁組でもらわれてゆくことでもない限り、間引きすることを強制した。

大村藩のクリシタンたちが一番辛かったのは、この嬰兒殺しの強制であった。

これは、親としての情ばかりではなく、ゼウスの教えにも背くことであった。

キリシタンの教えで間引きは大罪だということは当然知っていた。

しかし、何とか生きのびさせて、人目をしのんで育てても、人別改め（戸籍調べ）のときになれば、すぐみつかってしまうことはわかりきっていた。仮にみつからなかったとしても、無籍者として、一生日蔭の身で暮らさなければならなかった。どちらを選んでも不幸であった。

その上、大村藩は、明暦三年（一六五七年）に「郡崩れ^{こほりくず}」といわれるキリシタン迫害があり、六百八名が捕えられた。その後、キリシタンの取り締まりが厳しくなった。

立地条件の悪さ、間引きの強制、キリシタンの迫害と悪条件が揃った住民たちは、立地条件がいい五島なら当然生活も楽だろうし、間引きもしなくてすみ、また本土から遠く離れてキリシタンの取り締まりもそんなにひどくないだろうと思い、移住を決意した。

寛政九年（一七九七年）、百八名のキリシタンたちが五島へ上陸した。

その後、次々に移住し、結局三千名は移住しただろうといわれている。

この物語の主人公の先祖もこの当時に五島へ移り住んだのである。

当時の俗謡に、

「五島へ 五島へと皆行きたがる

五島はやさしや 土地までも」

という歌がある。

大村藩の潜伏キリシタンには本土から遠く離れた、まだ開けていない五島は、隠れ住むのに恰好な場所であると思い、やって来たものの、肥えた農地や、立地条件の良い漁港は、地下者（先住民）が占拠していたので、結局、外海と同じような劣悪な土地しか残されておらず、生活は楽にはならなかった。

「五島は極楽

行って見て地獄」

ということばがキリシタンの口伝えで残っている。

しかし、行って見て地獄といっているが、それは憧れが強すぎたためで、生活は相変わらず苦しかったが、間引きを強制されることがなかった点は救いであった。

貧しかったが、開拓しながら、信仰も守り育てることができた。

人目をしのびながらも、少しずつ生活は安定してきた。

貧しいながらも人間らしい暮らしが定着しつつあった。

運命の出会い

田山慶之進の出生年月日は不詳であるが、妻、サトは天保十二年（一八四一年）、三月二十三日、大村藩の隠れキリシタンたちが移り住んだ水の浦で生まれた。